

女性外科医の時代

文
伊藤公一

text by Kouichi Ito

表参道日記

文部科学省エリート官僚の息子が東京医科大学に不正入学をした話題が席巻している。その件は論評に値しないが、付随して、大学の方針として、隠密裏に女子入学者を制限していたことが明らかとなった。その理由を問われ、大学側は筆記試験をフェアにすると圧倒的に女子が優位になる。医師になった際、体力的に厳しい外科系診療科目を選ばない。出産や子育てなどのライフイベントでキャリアが中断してしまう。と馬鹿正直に答弁し、当然ながら世間のバッシングを受けている。

そこで自院における女性外科医師の活躍を紹介する。

伊藤病院は1937年創業の甲状腺疾患専門病院であり、祖父が20年、父が40年、筆者が継承し21年目となる。そのなか女性医師の勤務は初代時代には皆無、2代目時代には数名の内科医師が勤務していたものの、外科医師については非常勤医師も含め存在しなかった。

そして筆者が院長職を継承し、6年目である2003年に初めての女性常勤外科医師が入職。その後急増し、ここ数年は女性外科医師が約4割を占めるようになった。ちなみに内科常勤医師は、現在、部長を除くメンバー12名、全員が女性医師である。そして大半がママさんドクターである。

そもそも医師国家試験にパスしなれば、医者の仕事は出来ないわけだが、

その男女比は平成時代に入り、女性合格者の割合が次第に増え始め、近年では医科大学卒業生約3分の1が女性で占められるようになった。

よって新人医師数が固定され続ける限り、約30万人の医師数は変わらず推移し、20年後の現役医師3人に1人は女性医師となり、我が国の医療提供体制に変化が見られることであろう。

確かに、そのなかで危惧されるのは、益々の診療科偏在であり、女性医師数の多い診療科目は皮膚科、小児科、眼科と続き、外科医は少数派ではあるが、その数は増え続け、他の診療科目同様に、将来的には3分の1近くが女性医師で占める時代が想像出来る。

そこで当院外科医師の日常を見れば、男女を問わず、その任務は、カンファレンス参加、外来、臨床検査、入院患者マネジメント、手術、放射線治療、化学療法、緩和治療、看取りまでと実に多岐に渡っている。

さらに、それらの激務に加え、学術活動をこなし、当然のこととして多職種で形成される病院組織内において、医師としてのリーダーシップにも努めている。

これらの重責を、既婚女性外科医師が主婦業、母親業と両立しつつ、懸命に働く姿に、病院長として心より感謝、感謝をしている。

それらの実現には、勤務先病院における受け入れ体制に加え、国や地域の

ワークライフバランスに対する配慮や、学会による支援・改革などは重要であろう。

とは言え、女性医師が働くうえで、最も肝心なことは、女性ならではの苦勞を出来る限り理解し、心から応援する施設管理者の姿勢と認識している。

医師の仕事

だけに女性のハンディキャップがあるわけではないが、今回の東京医科大学騒動は裏口入学より、入試時の性差別に対して海外からの批判が続いていると聞く。

騒動後、身近で働く東京医科大学女子卒業生が、一際、優秀に見える。

Profile

1958年生まれ。伊藤病院3代目院長。北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師になって以来、国内外にて一貫してパセドウ病、橋本病、甲状腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。東京女子医大、筑波大学院非常勤講師。日本医科大学、了徳寺大学客員教授。日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働省診断群分類調査研究班班長。伊藤病院 <http://www.ito-hospital.jp/> 名古屋甲状腺診療所（名古屋分院） <http://www.kojin-kai.jp/nagoya/> さっぽろ甲状腺診療所（札幌分院） <http://www.kojin-kai.jp/sapporo/>

